

(5) 島内周遊視察（世界遺産）

（報告者：沖縄経済同友会 事務局次長 石垣 卓哉）

視察3日目の10月9日は、韓国人にとっては特別な意味を持つ「ハングルの日」。韓国語を表記する文字「ハングル」が作られ頒布された日で、1446年に頒布、今年で568年を迎える。

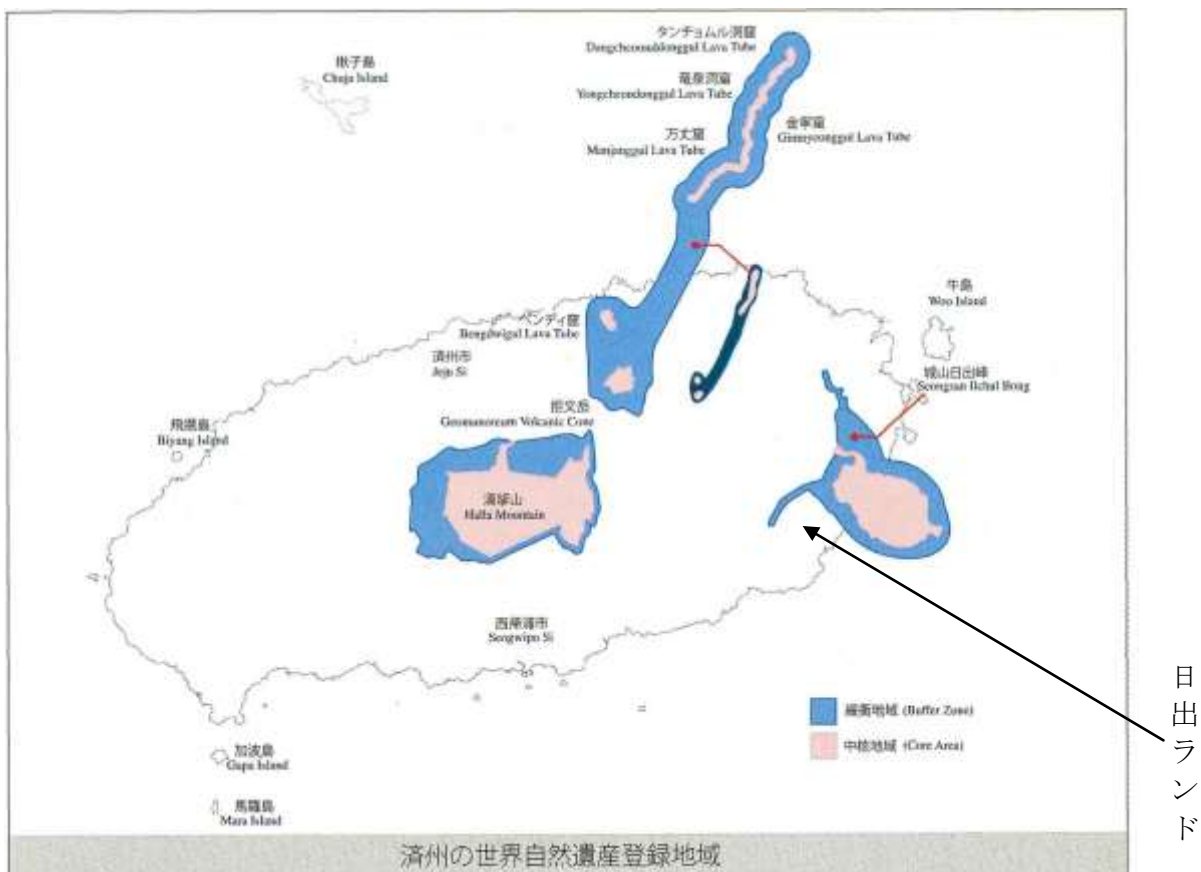
「ハングルの日」は1970年に祝日として制定。1990年から2012年までは、公休日縮小の一環で祝日ではなくなったが、2013年より再び祝日となった。

この日「ハングルの日」は休日ということもあり、島内周遊視察の日とした。

済州道では2007年、韓国で初めて「済州火山島と溶岩洞窟群」という名で世界自然遺産に登録された。済州道全体面積（1,849km²）の約10%に相当する。

済州の世界自然遺産

遺産名称	済州火山島と溶岩洞窟群
遺産地区	漢拏山自然保護地区（ハルラサン） 城山日出峰（ソンサンイルチュルボン） 拒文岳溶岩洞窟系（コムンオルム）
遺産面積	18,997 ㉮（中核地域：9,605 ㉮、緩衝地域：9,392 ㉮） ※100 ㉮ = 1km ²
登録年度	2007年7月2日
登録理由	ひととき優れた景観的価値、顕著で重要な地質学的価値



※表およびMAPは済州特別自治道庁資料より

共催である環境・農業・エネルギー委員会では、今年度の活動方針の1つに、「世界自然遺産登録、環境問題等に関する調査・研究」を掲げた。沖縄および奄美において世界遺産登録に向け活動が活発になっている中、「済州火山島と溶岩洞窟群」の一部をはじめ、主要観光地を視察した。

済州は「三多三無」の島と言われている。「三多」とは、石多・風多・女多を意味する。「三無」とは、泥棒がなく、乞食がなく、大門が無いことから由来した言葉である。済州文化も学びながら視察した。

(1) 日出ランド内 美千窟 (ミチョングル)

韓日親善協会の康才業 (カン・チェオプ) 会長が経営する「日出ランド」で済州文化を堪能した。「日出ランド」は溶岩洞窟の美千窟と済州島の美しい自然を散策できる広い庭園があり、済州島から優秀観光事業体として選ばれた観光地。B o A が出演した韓国の人気番組「ランニングマン」(2012年4月放映)の撮影地としても有名。

他の観光地とは違い、アートセンター (陶磁器作り、染織作業、Tシャツ作り)、民族家屋、サボテンハウスや亜熱帯植物の散策路、樹木園、水辺公園等が整備されており、芸術的芸術体験、自然学習体験効果まで得ることができる観光地である。

【美千窟 (ミチョングル)】



日出ランドの敷地内にある「美千窟」は、25万年前に溶岩が流れてできた洞窟。流線の美しさがあるという意味で、美千窟と名付けられた。ひんやりとした空気の中、地下の神秘を保存している学術的、観光的、文化的な価値を持つ重要な資源となっている。廻りには汚染されていない清浄な空気、澄んだ水、広い原野と共にオルム (寄生火山) が分布している。特に、洞窟の創世的な暗黒の地下空間は、人間の精神、本質、未来について熟考できる、思索と創造の空間になるようです。1.7kmの内365mを一般公開にしている。

「美千窟」は世界遺産ではないが、壁面と床面に溶岩の流線がはっきりと残っており、世界遺産「拒文岳溶岩洞窟系」の萬丈窟 (マンジャングル) と同様の洞窟と言える。



康才業会長（右から3人目）に日出ランドを案内していただきました。



濟州の守護神「トルハルバン」
方言で「石製の爺さん」を意味する。



20世紀前半まで主流であった民家の様子



古民家で飼われている黒豚



【写真左】玄関の棒の数で在宅の有無を知らせる。「三無」のキャッチコピー通り、泥棒と大門が無いと言われた濟州島ならではの玄関。3本とも穴に通されているときは、家に人がいないというサイン。1本だけ降ろされているときは、家の人ちょっと出かけているがすぐ戻るという意味。3本とも降ろされているときは家の中に人がいるので入って来てよいという意味とのこと。



【写真右】玄武岩が豊富な、火山島濟州ならではの石垣。強い海風から耕作地と家屋を守る。島のいたるところで見られる。のどかな、昔ながらの沖縄に似たような風景でした。

《昼食》

フェニックス・アイランド・リゾート内にあるレストラン「ミント」で昼食。

世界で活躍する建築家・安藤忠雄氏が設計したレストラン。全面ガラス張りになっていて、海に浮かぶ世界自然遺産「城山日出峰」を眺めることができ、海上で食事をしているような気分が味わえる。韓国ドラマ「花より男子」のロケが行われたところでもある。



レストラン「ミント」外観
手を広げたような形をイメージして設計



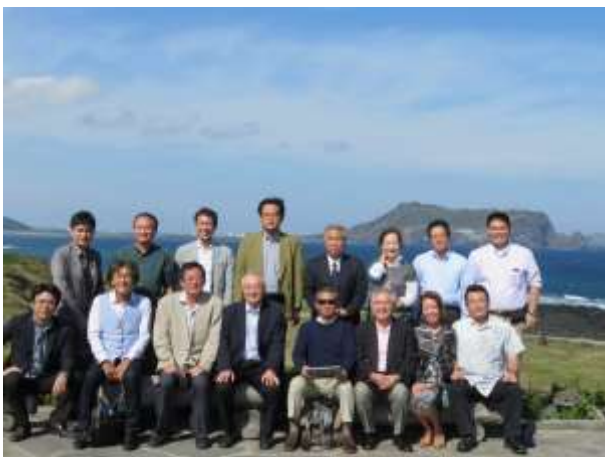
全面ガラス張りになっている。



窓の後ろには「城山日出峰」が見える。



昼食は「海鮮料理」



「城山日出峰」をバックに集合写真。



草原に放牧されている「済州馬」

(2) 世界自然遺産「城山日出峰」(ソンサンイルチュルボン)

日が昇る峰と呼ばれる城山日出峰は、今から約5000年前、浅い水深の浅い海底から水成火山の噴出によって形成された凝灰口である。高さ180mの日出峰は濟州島の東海岸に巨大な古城の如く位置するだけでなく、海岸の岸壁に沿って見事な内部構造を多彩に見せており、全世界の水成火山の噴出や堆積過程を理解するのに重要な資料を提供している。城山日出峰はこうした地質学的価値が認められ、2000年、国家指定・天然記念物第420号と2007年、ユネスコ世界自然遺産に指定された。(現地案内板より)



頂上の噴火口部分の直径は600m、深さ90m



「城山日出峰」をバックに集合写真。

ユネスコ世界自然遺産に登録されてからは、海外からの観光客も増え、年間300万人近い観光客が訪れる人気観光地となった。現在は自然を壊さないように観光客の通る道などが決まっているが、自然保護地域に指定される数十年前までは、濟州島の人たちが普通に入り遊んだ場所だった。また、濟州島の最東部に位置するロケーションから、日の出ハイキングを楽しむ観光客も多い。



入場口から頂上まで約30分かかる。
残念ながら途中で引き返し。



下には海女さんの直販所も併設。
カヤックに乗れるところもある。



「UNESCO WORLD HERITAGE」と記されている。



現地案内板

(3) 世界自然遺産「漢拏山自然保護地区」(ハルラサン)

漢拏山は済州島の中央に位置する標高1950mの韓国最高峰の火山。また、様々な植生分布を成し、学術的価値が高く、動植物の宝庫として1966年に天然記念物第182号として「漢拏山天然保護区域」に指定、また、季節により変わる色とりどりの自然景観は訪れる者を自然のとりこにする名山として、1970年に「国立公園」に指定、続いて、2002年には「ユネスコ生物圏保全地域」に指定された。

特に太古の神秘をそのままに感じさせる漢拏山と美しい大地、世界中の人々が共に守らなければならない貴重な遺産として認定され、「漢拏山自然保護地区」は「城山日出峰」、「拒文岳溶岩洞窟系」とともに、2007年に「ユネスコ世界自然遺産」に登録された。



頂上の噴火口には白鹿潭（ペンノクタム）と呼ばれる火口湖（直径500m）があり、周囲は1800種類におよぶ貴重な動植物の宝庫となっている。



済州島と漢拏山を島の北側から望んだ光景



展望台から漢拏山を眺める。天気は良好であったが、残念ながら漢拏山は見え
ず。世界遺産のエリアは標高800m以上の自然保護地域なので展望台もエリア内である。
漢拏山に行ったわけではないが、世界遺産に足を踏み入れたことになる。

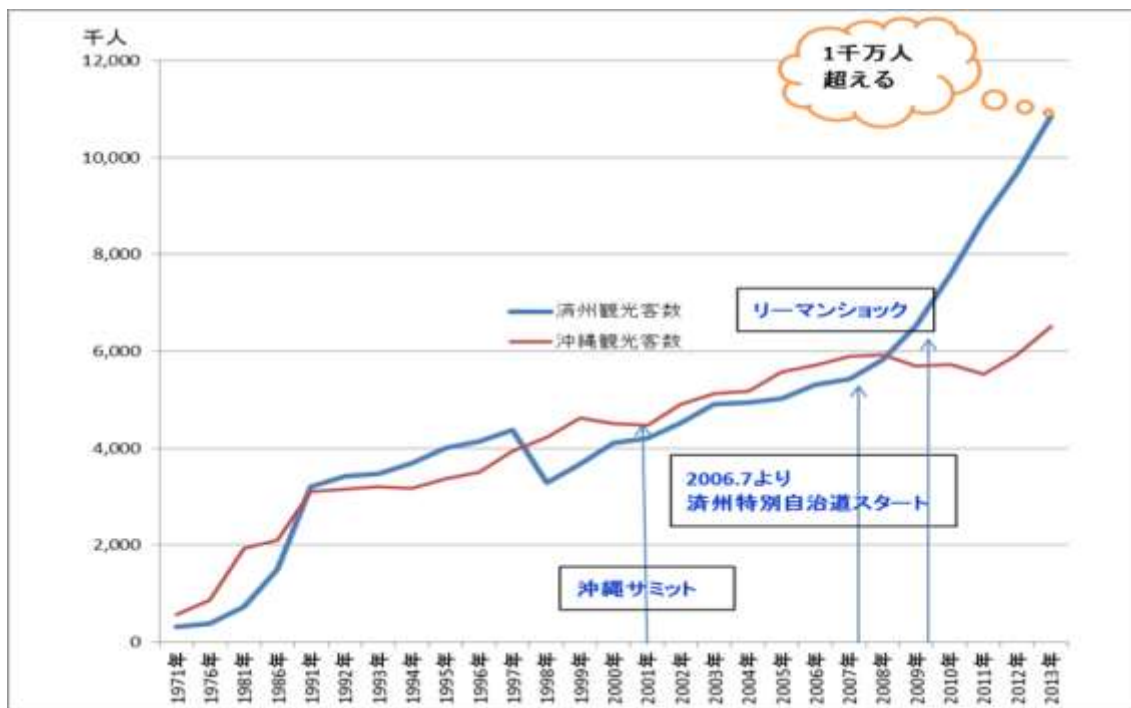


展望台付近でトレッキングを楽しむ人々。漢拏山は、4つの登山コースが整備されている。
春はツツジ、夏は高山植物、秋は紅葉、冬は雪景色と、四季折々の景色を楽しめる。
頂上まで10km以内の短い登山路なので、日帰りで登山ができる。

以上、世界自然遺産登録地域を中心に視察した。平成25年に観光客1,000万人を達成した要因には、道州制導入に伴うノービザ制度や世界自然遺産登録による知名度向上があげられるが、トレッキングコース「オルレ」の認知度の高まりも大きな要因として取りあげられている。次頁以降に「済州道と沖縄県の観光客数」について述べた後、「オルレ」について報告する。

《済州道と沖縄県の観光客数》

【済州道と沖縄県の観光客数の推移グラフ】



資料: 沖縄は『沖縄統計年鑑』、済州は『済州統計年報』を用いて筆者作成。

注: 1971年は、沖縄のみ1972年の数値である。済州は12月末、沖縄は3月末、ただし、2013年は12月末

※グラフ作成: 沖縄国際大学経済学部 吳錫畢教授

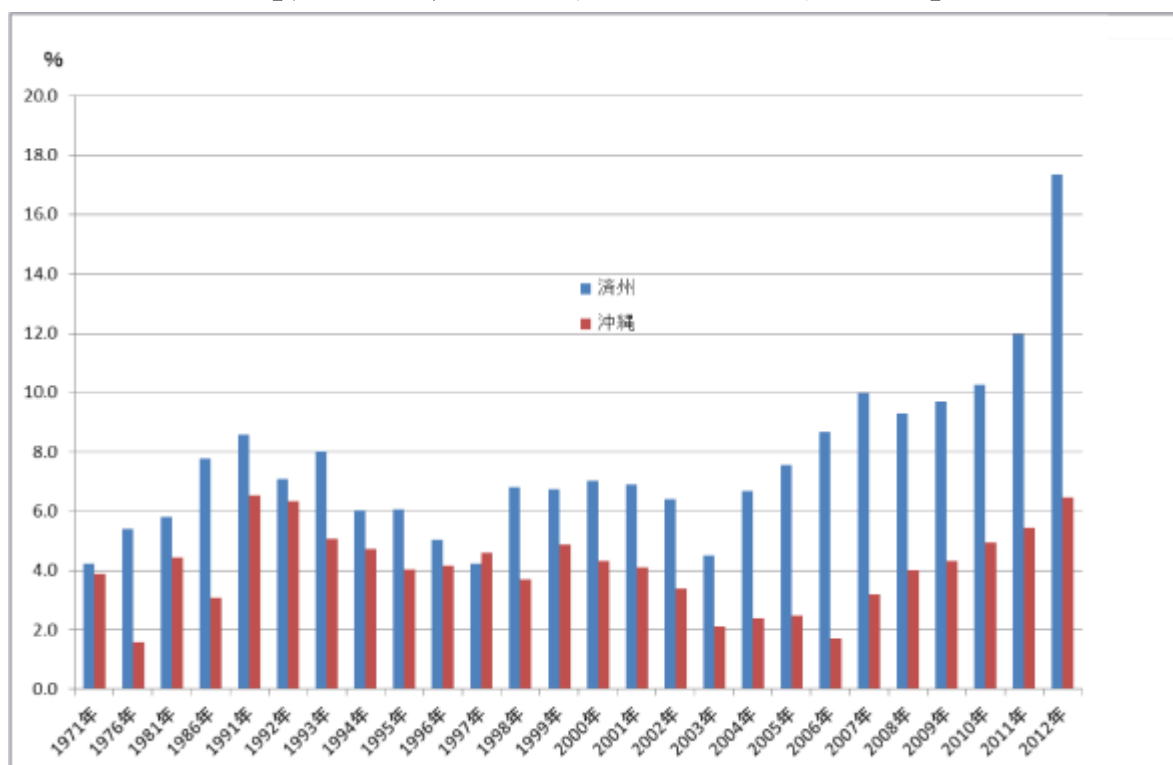
【済州道と沖縄県の観光客数の推移表】

暦年	済州道		沖縄県		備考
	実数	対前年伸び率	実数	対前年伸び率	
2006	531 万人	5.8%	564 万人	2.5%	済州特別自治道 スタート
2007	543 万人	2.2%	587 万人	4.1%	世界自然遺産登録
2008	582 万人	7.2%	605 万人	3.0%	
2009	652 万人	12.1%	565 万人	▲6.5%	新型インフルエンザ
2010	758 万人	16.2%	586 万人	3.6%	
2011	874 万人	15.3%	542 万人	▲7.5%	東日本大震災
2012	969 万人	10.9%	584 万人	7.8%	
2013	1,085 万人	12.0%	641 万人	9.9%	観光客 1000 万人達成

済州道データ: 済州特別自治道庁資料

沖縄県データ: 沖縄県文化観光スポーツ部

【済州道と沖縄県の外国人訪問者の推移グラフ】



資料: 沖縄は『沖縄統計年鑑』、済州は『済州統計年報』を用いて筆者作成。

※グラフ作成: 沖縄国際大学経済学部 吳錫畢教授

済州道は、2006年「済州特別自治道スタート」、2007年「世界自然遺産登録」の時期の観光客数は、2006年：531万人、2007年：543万人、であったが、その後の急激な増加で、2013年には1,000万人を達成し、2倍となる1085万人となった。うち、外国人観光客も全体の21.5%となる233万人(2013)となっており、中国人を中心とした外国人観光客増加も要因としてあげられている。

中国人観光客は外国人全体の77.7%(2013)を占めている。中国人観光客の増大は観光業への依存度が高い済州においては、おおむね歓迎されているが、一国集中によるリスクの増大や中国人観光客のマナー問題および犯罪の増加等の懸念が指摘されるほか、済州経済への利益が少ないこと等を理由に冷めた見方もある。また、中国人観光客の増大に呼応するかのように中国資本による済州への投資も増えており、済州の不動産が買い占められるのではないかと懸念の高まりもあるようである。

沖縄県も済州道ほどではないが、新型インフルエンザや東日本大震災の影響による一時的な落ち込みを考慮しても、観光客数はますますの伸びであり、今後も順調な伸びが予想される。将来、「奄美・琉球」が世界自然遺産に登録できれば、知名度向上により、国内外とも観光客増加が期待できる。済州の中国人観光客事情を注視するとともに、「ビジットおきなわ計画」では、観光施設等の外国人表示の促進、今後の増加が見込まれるムスリム層をはじめとした外国人観光客の多様な文化や習慣等にも対応できる受入体制の充実・強化が必要とされている。

(6) オルレ観光について

(報告者：(株)前田産業 代表取締役社長 前田 裕子)

はじめに

オルレとは・・・

濟州島の言葉で「大通りから民家へ通じる小道」を意味するが、濟州島海岸沿いの小さな道をウォーキングコースに名づけられてから、トレッキングコースの総称として韓国内で有名になった。



オルレコースが記載された地図

1. オルレの概要

もともとは濟州島出身のジャーナリストであるソ・ミョンソク氏が中心となって、当地の自然や風俗を活かしたトレッキングコースを開設する運動が始まり、ボランティアの手によって探し出した島の隠れた道を散策路として一般に公開しており、2007年9月に第1コースが開設されて以降、現在では26コースが存在する。総距離は421.9kmで、ほぼ海岸沿いに濟州島を一周出来るようになった。散策路は今も造成中。

コースには要所要所で矢印や目印などが設置されていて、各自が自由に散策できるようになっている(次頁写真参照)。

オルレの整備や管理運営は、「社団法人濟州オルレ」が行っている。費用は個人・企業からの寄付金が大半を占め、行政が一部予算を出しているとの事。寄付は金銭のみならず、オルレの為にできることをやる「オの寄附」という仕組みもあり、サインデザインなどがその一例。さらに、約400名の地域ボランティアなどの多くの人々がオルレに関与し、地域の賑いを生んでいる。

官民一体となって取り組んでいるオルレ。濟州で手にした地図には全てオルレコースが記載されていたほど、濟州島の観光の主要のものとなっている。



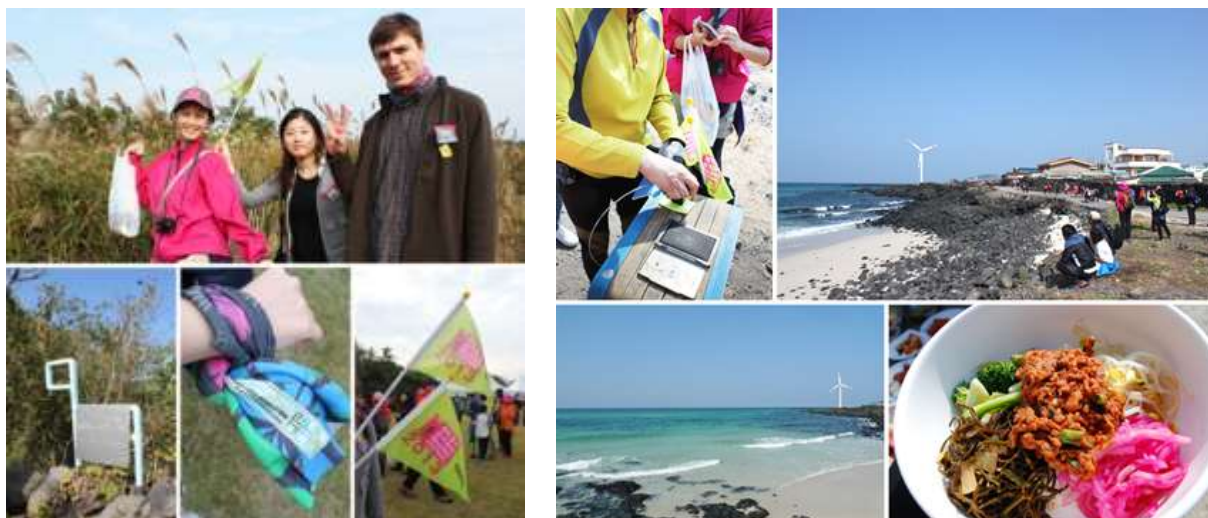
※オルレコースの目印や矢印。(画像は、済州オルレに関するHPから転用しています。)

2. オルレの発展

済州島は、2002年に「ユネスコ生物圏保全地域」、2007年「世界自然遺産」、2010年には「世界ジオパーク」に認定され、ユネスコ自然環境3分野で「三冠王」に輝いたことから、豊かな自然を散策するという目的や、スローライフの流れや韓国本土の健康志向の高まりから、トレッキングの「オルレ」は韓国国内で人気が高く新たな観光資源として注目されている。

また、オルレコースは伝統市場を経由するなど地域商圏と連携する事で経済の活性化にも繋がっている。

コースをまわりポイントをためる仕組みや、周辺の飲食店や宿泊施設などで買い物やトイレを使用できる流れを構築。トレッキングイベントなども各地で開催。



※済州オルレウォーキングフェスティバル2013の様様 (韓国観光公社のHPより転用)

2013年4月には国際トレイル賞 (ITA) を受賞した。

2012年2月には、九州観光振興機構との間で協定を結び、九州各地にも類似のトレッキングコース「九州オルレ」が開設されている。



コース上の目印。青矢印がゴール方向、赤矢印がスタート方向を示す。漢字の「人」を模したわかりやすいデザイン。



濟州島の馬を模した標識。頭の向いている方が進行方向。起点や終点、眺望ポイント、分岐点などに設置されている。



石に書かれた小さい標識。地図が無くても迷わないように、さりげない配慮が伺える。



※画像は九州観光推進機構のHP「九州旅ネット」より転用

3. 濟州島オルレについての感想

沖縄とよく比較される濟州島について、恥ずかしながら初めて知ることが多く参考になった。まず、観光客が一千万人（国内800万人、国外230万人）を昨年達成しているという事、ユネスコの自然環境分野で「三冠王」でありその自然を多いに観光に活かしている事などである。

世界自然遺産登録2007年の翌年‘08年には観光入域客数580万人だった事から、5年間で186%の伸びとは驚きであるが、ユネスコお墨付きの栄冠をもつという事の影響力を数字で思い知らされた。

宿泊施設やインフラ整備が追い付いていないというのが課題と行政の方がおっしゃっていたが、ノービザや不動産取得による永住権の取得など、政策が果たして正解だったのかは疑問が残るところである。

中国人観光客と共に中国マネーで土地が買収されているという現実将来に不安を抱いている地元通訳や韓日交流会での声を聞き、沖縄はしっかりと足元を固めて質も量も追う21世紀ビジョンを継続していくべきだと感じた。

「オルレ」も今回初めて知った。一人の女性の発案から、自主的なボランティアの力で、三冠王に輝く濟州島の自然を生かした「オルレ」というトレッキングと、地域経済を絡めて新しい観光スタイルとして定着させた事は素晴らしい。

残念ながら今回の視察でオルレコースを歩く事は出来なかったが、近くの公園内の散策コースを移動の合間に15分程歩く事が出来た。大型バスが何台も駐車しており、国籍問わず散策を楽しむ方が多く、短い時間ながらも人気ぶりがうかがえた。リュックを背負いスポーツウェア着用のグループや夫婦は、仁川からの機内や空港内でもよく見かけた。オルレ熱は韓国内では大流行のようである。仁川空港内にトレッキングウェアショップがあったのもその流れだろう。

今後やんばる地域を含む奄美・琉球の世界自然遺産登録が認定されたら、足で自然を楽しむオルレは、北部観光の起爆剤となり、誘客と滞在日数の増加、地域経済に貢献する材料になり得ると感じた。特にやんばるでは辺土岬や石林山などの既存の目玉スポットと、林道や海沿いの集落などにコースを設ければ大がかりな投資もなく、やんばるの世界自然遺産をアピールできる。健康長寿を取り戻す沖縄県民への啓蒙としても活用できるだろう。

沖縄県内、すでにあるウォーキングコースや町歩きコースなどを発信していく仕組みづくりや、「オルレ」に代わる沖縄らしい言葉もあるといい。「やんばる・しままーい」(by事務局又吉さん)など夢が広がる。

遅まきながらの初濟州島であったが、道州制、ユネスコ三冠王、IRの導入など先を行っている事に驚きはしたものの沖縄も負けてないし、沖縄の伸びしろを改めて感じた視察であった。



※立ち寄った公園。地図やコースの表示は充実



※トレッキングウェアの人多し。大型バスもひしめく駐車場。



濟州島をご案内いただいた現地ガイドは、全国観光濟州支社のハン・ミへMsさんでした。丁寧かつユーモアあふれる説明で、濟州島に対する愛着が伝わりました。安心して楽しく濟州島視察ができ、ありがとうございました。これからも頑張ってください。

平成26年11月
沖縄経済同友会 事務局